

---

**けいおん！ - ごめんなさいが言えなくて -**

4 - B U

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！ -ごめんなさいが言えなくて-

### 【コード】

N8819P

### 【作者名】

4-BU

### 【あらすじ】

私が悪いのは分かってる・・・たった一言だけで済んだのに・・・素直に『ごめんなさい』って言えば良かったのに・・・みんなに謝りたい・・・

「違う違う！ そうじゃないもん！ 絶対に律ちゃんがおかしいよ  
！」

「何で唯は分かんないんだよ！ 私が言ってるのは！」

「ふん！ 私悪くないもん！」

「はあ？ だったらもう好きにすればいいだろ！」

そう言っただけで律ちゃんは音楽室の扉を強く閉めて出て行きました。

「おい！ 待てよ律！」

澪ちゃんは慌てて律ちゃんの後を走って追いかけてきました。

どうしてこんな事になったのかなあ・・・喧嘩の原因を思い出そ  
うとしても思い出せない・・・

ほんの些細な事が発端の筈なのに、売り言葉に買い言葉で感情が  
どんどん大きくなって・・・

最初のうちに素直に謝ればよかった・・・でももう遅いよね・・・  
律ちゃんあんなに怒ってたもん

「うええええええええん」

「唯先輩、とにかく落ち着いて下さい」

「私・・・私・・・」

「唯先輩は悪くないです！ 間違ってるのは律先輩の方ですよ！」

「そうね、私もさっきのは律ちゃんが言い過ぎてると思うわ」

どちらが間違ってるとか、正しいとか・・・今の喧嘩にそんなのは無いって分かってるもん。

でも今は私の味方になってくれるムギちゃんとあずにゃんに甘えていたい・・・

「澁先輩も酷いです！ 結局は唯先輩よりも律先輩が大事なだけで事の善悪なんか関係ないんですから！」

「あの二人は幼馴染だしね、仕方ないわよ」

私と律ちゃんの怒りの感情が移ったみたいに二人の感情が昂ぶってる・・・

もう何もかもが手遅れなのかなあ・・・

「うえええええええええん」

「大丈夫ですよ！ 私は唯先輩の味方ですからね」

「大丈夫唯ちゃん？ 今日はもう帰りましょ」

帰って憂に甘えたい・・・でもこんな赤い目で帰ったら心配を掛けちゃうよね。

せめて涙で腫れた目だけはどうにかしたいな・・・少し時間を置けばマシになると思うけど、いくら何でも二人を付き合わせる訳にはいかないもんね。

私はムギちゃんとあずにゃんに先に帰るようお願いします。

二人は心配そうな顔だったけど、私が落ち着けるなら・・・そう考えてくれたのか先に帰る事になりました。

「わかりました・・・でも私は何があっても絶対に唯先輩の味方ですからね！」

「ありがとうあずにゃん」

「何かあったら直ぐに私か梓ちゃんの携帯に連絡してね」

「ムギちゃんありがとうね」

二人を見送った後、私は音楽室のソファーに座り壁を見つめていました。

安心して何も考えられないんだったら、その方が楽だったのにな。  
・頭の中止め処なく後悔と自虐の念が溢れてきちゃう・・・  
もうヤだよ、何もかも忘れたい・・・全部夢だったらしいのに・・・

考えても考えても出てくるのは答えではなく卑怯な現実逃避だけ。  
そんな時、ふと違和感を感じて視線を移した先にそれはありました。

あれ？ これ何だろう？ こんなの前からあったっけ？

それはいつもお茶を飲む時に座っている椅子の後ろ、その壁の足元にポツンとありました。

こんな所に小さな扉が・・・でもこの壁の向こうって外だよな？

人が一人這い蹲ってようやく入れそうな小さな小さな扉。

私は恐る恐るドアノブに手を掛け、思い切って扉を開けてみました。

そ・・・外じゃない・・・

本当だったら扉を開けると外の風景が見えるはずなのに・・・そこには真つ暗な空間が続いていました。

手を入れてみても何も当たる物は無くて、どう考えても壁以上の厚さのある異常な空間・・・

これっておかしいよね？ どう考えたって絶対に変だよな？

異常を感じてるんだから離れば良かった・・・何もしなければ良かったのに・・・

その時の私はやっぱり冷静な判断が出来なかったんだと思います。

この奥ってどうなってるんだろう・・・どこに繋がってるのかなあ？

好奇心に支配されて私は奥へ奥へと進みました・・・  
目が慣れる事のない暗闇をどこまでも、どこまでも・・・

どれくらい時間が経ったのか・・・どれくらい進んだのか・・・

もうこうなったら半分意地だね、絶対に向こうに何があるのか見てやるんだから！

でも腰が痛くなって来ちゃったよ・・・

ん？・・・あれは？

奥の方にうつすらと明かりが見えるような気が・・・

やったあ！ やつと外に出られる～！

私は腰の痛いのも忘れて進む速度をあげました。

ぼんやりとした空間がだんだんと大きくなり、ようやく私は外に出る事が出来ました。

中に入ってから何時間経っていたのか分かんないけど、辺りはすっかり暗くなっていて窓から差し込む月の光だけが頼りでした。

暫くして目が慣れてくると廻りの状況が見えるようになり、ようやくそこがどこなのか理解出来ました。

あれ？ 音楽室？ 元に戻っちゃった・・・

一体どう言う事なんだろう？ 暗闇で知らず知らずのうちに円を描いてたつて事なのかな？

でも、そもそも壁の向こうにトンネルがある事自体が変な事だし、全然分かんないよお。

何とか理由を探そうと私は室内を見渡し、そしてある異変に気が付きました。

部屋の造りや扉の位置、窓の形、どれをとっても音楽室には間違いないんだけど、ムギちゃんのティーセットが入った食器棚が無い・・・さつきまで座ってたソファーも無い・・・

どうして？ 私が扉の中に入ってる間に誰かが片付けちゃったの？

頭の中が整理できず、もう何も分かんない状態になったけど一つだけ大変な事に気が付きました。

あゝ！ こんな暗くなるまで帰らなかつたら憂が心配してるよお、また怒られちゃう！

私は急いで家に帰る事にしました。

階段を駆け下り、門をよじ登り、いつもの通学路を走っているはずなのに・・・

あれ？ こんな所にコンビニなんてあつたっけ？

次々と見知らぬお店が目に見え込んできました。

見慣れているのに見慣れない町並み・・・不思議な感覚が私を襲いました。

もし次の角を曲がって家が無かつたらどうしよう・・・

でもそんな不安は直ぐに消えました、目の前には大好きな憂が待ってる家があったから。

私は玄関の鍵を開け、遅くなった事と、律ちゃんと喧嘩をした事を誤魔化す為に元気な声を出しました。

「憂、ただいま〜！ うっかり部室で居眠りして遅くなっちゃった、えへへへ」

「え?! 誰なの?!」

そう言っつて奥から出てきたのは憂ではなく、知らない女の人でした。

何だかお母さんに似てるなあ・・・親戚の人なのかな?

「あのお・・・どちら様ですか？」

「ま、まさか・・・お姉ちゃんなの?・・・」

「へ?・・・」

「お姉ちゃん! 今までどこに行ってたのよ!」

え? この人は何を言ってるの?

そもそも、どうして私の事を「お姉ちゃん」って呼ぶの?

その女の人は混乱する私に抱きつき、大声で泣きだしました。

いったい何がどうなってるの？・・・全然分かんないや・・・

- 第二部 -

いきなり知らない女の人に抱きつかれて泣かれても訳がわからないよ。

雰囲気なんかはお母さんに似てるから親戚の人で間違いないとは思っただけど……

「あ、あの……一体誰なんですか？ とにかく、その……離して下さい」

「お姉ちゃん……10年もの間どこに行ってたのよ……」

10年？ この人怖い！ 何言ってるのか全然分かんないよ！  
私は女の人の腕を振りほどき、リビングへと向かいました。

「憂！ 居るんでしょ？ この人誰なの？」

リビングの扉を開けた私は啞然としました。

見た事のない家具やテレビ……壁紙や絨毯に至るまで全てが私の知っている物とは違っていたから。

何よこれ……家を間違えたなんて事はないよね、玄関は自分の鍵で開いたんだし。

私は慌てて自分の部屋へと向かいました。

扉には確かに『ゆいのへや』って書いてある、間違いないことは私の家・・・だったらあのリビングは何なの？ たった半日で全部入れ替えたって言うの？

「憂々！ どこなの？ 早く出てきてよ！ 私・・・もう」

何が起こったのか分からず、私は不安と恐怖で泣きそうになりながら自分の部屋に入りました。

そこには今朝学校に出掛ける前の状態のままの空間がありました。脱いだままのパジャマが乗ったベット、寝る前に読んでいた漫画が置いてある机、部屋の隅には大事な大事なギター・・・

あれ？ 私慌てて帰って来たからギターと鞆は音楽室に忘れて来た筈じゃ？ 誰かが持ってきてくれたのかな？

ギター！ 私のギター！

ギターを抱きしめれば少しは落ち着ける、そう思ってたギターケースのチャックを下ろした私の目に飛び込んできたのは・・・

弦が錆び、ボディ全体にうつすらとカビの生えた酷い状態のギター太の姿でした・・・

何これ！ ひ・・・酷い！ どうしてこんな事に・・・

「ごめんね・・・お姉ちゃんが居なくなっても2年くらいは毎日お手入れしてたんだよ・・・お姉ちゃんの事を考えると悲しくて・・・

辛くて・・・でも、いつ帰ってきてもいいようにって泣きながらお  
手入れしてたんだから・・・」

「な・・・何を言ってるの？」

「お部屋もお姉ちゃんが居なくなった時のまま、出来る限り触らな  
いようにして来たけど・・・それが逆に私を苦しめた・・・お姉ち  
やんに関するものを見るだけで悲しくなって、でも処分するなんて  
絶対に出来なくて・・・いつしか私はお姉ちゃんのお部屋に入る事  
も出来なくなってた・・・」

な・・・何なのよそれ！ 分かんない、分かんない、分かんない、  
分かんない！

「お姉ちゃん、ここはホコリっぽいから私のお部屋に来て」

そう言つと女の人は憂の部屋に入ろうとしました。

「ちよつと！そこは憂の・・・私の妹の部屋なんだから勝手に入  
らないで！」

「お姉ちゃん・・・だから私が憂・・・あなたの妹の憂なのよ・・・  
」

「え？さつきから変な事ばかり言つて・・・一体何が目的なん  
ですか?!」

苛立つて大声を出す私に構わず、女の人は憂の部屋に入って行きアルバムを持ち出して来ました。

そこには大好きな憂が写った写真が貼ってありました。

女の人が静かにページをめくっていくと、そこには私の知らない憂の写真がありました。

桜ヶ丘高校を卒業する憂・・・大学らしき建物の前に立っている憂・・・大学卒業の袴姿の憂・・・

ページをめくる度に目の前に居る女の人と同じ容姿になって行く写真の中の憂・・・

「まさか・・・まさか本当にあなたが憂なの？」

「・・・うん」

すぐには理解できない現実を突きつけられ、私は涙が止まりませんでした。

「憂・・・何が何だか分かんないよお・・・私怖いよお・・・うええええええええん」

「お姉ちゃん大丈夫だから！ 私が付いてるから泣かないで」

大人の憂は優しく私を抱きしめてくれました。  
それは妹と言うよりは母親に近く、落ち着くけれど少し不思議な  
気持ちでした。

「憂 何があったの？ どうして急に大きくなっちゃったの？」

「お姉ちゃん・・・それって逆だよ・・・お姉ちゃんは10年もの  
間どこに居たの？ どうして居なくなっただ時と同じ姿のままなの？」

どこに居たの？ って聞かれても、私はさっきまで音楽室に居て、  
律ちゃんと喧嘩して・・・

小さな扉の中に入るって不思議な体験はしたけど、一時たりとも  
記憶が欠ける事無く全部覚えてるもん。

私が憂に話せるのは数時間分の出来事だけだったけど、逆に憂か  
ら聞かされる話はずいには信じられない事ばかりでした。

「10年前・・・お姉ちゃんが居なくなった日に律さんと喧嘩をし  
たって言うのは、梓ちゃんに聞いたから知ってるよ」

「あずにゃんから？」

「うん・・・」今日唯先輩と律先輩が喧嘩して・・・でも私には何  
も出来なくて・・・唯先輩の力になれなくて『って泣いて電話して  
きたの」

「・・・あずにゃん」

「私、一生懸命お姉ちゃんを励まそうと思って、大好きなハンバーグとケーキをいっぱい作って待ってた・・・待ってたけど・・・いつまで経ってもお姉ちゃんは帰って来なくて・・・」

「そう・・・なんだ・・・」

「夜中になっても帰って来ないから・・・何か事故にでも遭ったんじゃないかって・・・」

憂は当時を思い出したのか、話すのが辛そうなほど目に涙を浮かべていました。

知らない間に私は憂に、こんなにも辛い思いをさせて来たんだね・・・

「ごめんね憂・・・」

「ううん・・・その後は梓ちゃんや先輩方にも電話連絡をして手分けして心当たりのある場所を探してもらったんだけど、どこにもお姉ちゃんが来た痕跡すら無くて・・・もしかしたらまだ学校に残ってるのかもってみんなで行って見たんだけど・・・」

「うん・・・」

「ギー太と鞆だけがポツンと置いてあって・・・どこにもお姉ちゃんの姿はなかった・・・」

「そうだ！ 軽音部のみんなはどうしてるの？ みんな元気なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

憂の表情が曇り、言葉を詰まらせてしまいました・・・まさか誰かの身に・・・

私の頭の中は不吉な考えでいっぱいになりました。

「梓ちゃんは今でも時々連絡してるから分かるけど、他の先輩方は・・・」

「憂は軽音部じゃなかったし、澁ちゃん達とも特別深いお付き合いって訳じゃなかったから卒業した後の事は知らなくても仕方ないよ」

「う・・・うん・・・」

「あずにゃんには連絡が付くんんでしょ？ だったらあずにゃんに聞けばみんながどうしてるか分かるよね？」

「・・・多分、梓ちゃんに聞いても分からないと思うよ・・・」

「え？・・・」

それってどう言う事？ 学年は違っても私達とあずにゃんはあんなに仲良かったのに、3年生が卒業した後は全然連絡を取り合っていないって事なの？

「私達3年生って、あずにゃんにとっては先輩であっても、仲間じゃなかったんだね・・・」

「違う！ そうじゃないよ！ お姉ちゃんが居なくなって梓ちゃんがどれだけ悲しんだと思ってるのよ！」

「え？・・・ご・・・ごめん」

「うっん、私の方こそ大きな声を出してごめんね・・・でも梓ちゃんの気持ちだけは疑って欲しくないの」

「・・・」

「私も梓ちゃんも大好きなお姉ちゃんが居なくなつて・・・どこに居るのかも分からなくて・・・二人で学校を休んで毎日『尋ね人』のチラシを泣きながら配つたのよ」

「憂・・・ごめんね・・・あずにゃんを疑うなんて・・・」

10年間・・・この時間の重みが実感出来ていない私は、みんなにどれだけ心配と悲しみを与えてきたのか理解出来てなかったんだと思う・・・

「先輩方と連絡を取らなくなったのは卒業後じゃなくて、あの日からなの・・・」

「あの日って、私が律ちゃんと喧嘩した日？」

「うん……あの日に軽音部は……放課後ティータイムは消滅したから……」

私は憂の言葉が信じられませんでした。

放課後ティータイムが……私達の大切な放課後ティータイムが消滅したって……どうして……

- 第三部 -

私は放課後ティータイムが消滅した理由を憂に尋ねました。

「あの日、音楽室に集まった私達が見たのは置き去りにされたギター太とお姉ちゃんの鞆だけだったの」

「うん」

「お姉ちゃんがギター太を置いたままどこかに行くなんて考えられなかったから、みんなで学校中を探したけど・・・やっぱりお姉ちゃんの姿はどこにもなくて」

「うん・・・」

「何か事件に巻き込まれたのか・・・そうじゃなかったらギター太を忘れて何処かに行くぐらい落ち込んでるのか・・・どちらにしても悪い考えばかりが頭の中をよぎって・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でもそれを口にするのが・・・言葉にしてしまうのが怖くてみんなは黙ってたけど・・・私が・・・私がみんなの緊張の糸を切ってしまったの・・・」

【お姉ちゃん、どこに行っちゃったのよ！ 一人で苦しんでないで出てきてよ！】

【私のせいだ・・・唯先輩があんなに悲しんでたのに一人だけ置いて帰っちゃったから】

【ううん、梓ちゃんのせいじゃないわ！ 私だって・・・あの時帰らないで唯ちゃんの傍に居てあげればよかった・・・】

【違う！ 梓ちゃんのも紬さんも悪くないよ！】

「この時、私は無意識のうちに律さんを睨み付けてたんだと思う・・・お姉ちゃんが居なくなったら不安を、悲しさを・・・誰かにぶつける事で心が崩壊する事を防ごうとしてたんだと思うの・・・」

【憂ちゃん・・・何でそんな目で律を見るんだよ！ 律が悪いって言いたいのか？】

【違うんですか?!】

【違うに決まってるだろ！ 唯にも原因があるから喧嘩になったん

だろ！】

【何言ってるんです！ お姉ちゃんが居なくなったのは律さんのせいじゃないですか！ お姉ちゃんにもしもの事があったら絶対に許さない！ お姉ちゃんを、お姉ちゃんを返して！】

「私は律さんをポカポカと泣きながら叩いたの・・・律さんは黙って抵抗しなかった・・・見かねた澪さんが私を払いのけようとしたんだけど、その手が運悪く私の顔に当たって・・・」

「うん・・・」

「ふらついた拍子に私は窓に倒れ掛かり、割れたガラスで手を切ってしまったの・・・」

【い・・・痛いよお・・・】

【澪ちゃん！ 何て事するの！】

【う・・・憂ちゃんが先に律に手を出したんじゃないか！】

【澪先輩、最低です！】

【な・・・何だよ！ みんなで私と律だけを悪者扱いして！】

【見損なっ たわ 澪ちゃん・・・】

「律さんはずっと下を向いて黙ってたけど、今思えば泣いてたんだと思う・・・その後は澪さんと一緒に音楽室を出て行って・・・それっきり話をする事は無くなったの」

「憂とあずにゃんは学年が違うから会わないでおこうと思えば出来るけど・・・ムギちゃんと同じクラスなのに一言も話す事がなかったのかな・・・」

「絢さんとは卒業までに何度かお話をしたけど・・・澪さんの方も絢さんの事を避けてたらしくて、結局その後は一言も話さなかったって言ってたよ・・・」

そうなんだ・・・

結局、放課後ティータイムが消滅した原因って私なんだね・・・

どうしてあの時、素直に謝らなかったのかな・・・

あの時、律ちゃんに『ごめんなさい』って言ったらこんな事にはならなかったのに・・・

「私、どうしたらいいの……うええええええん」

「お姉ちゃん泣かないで」

「憂〜！」

頭の中に悔やんでも悔やみきれない思いが溢れてきて涙が止まる事はありませんでした。

そんな私を憂は優しく抱きしめてくれたの。

「明日、梓ちゃんにも連絡するから、みんなでこれからどうしたらいいか考えましょ」

「うん……」

「今日はもう遅いから寝ましょ、私がずっと傍に居るから安心してね」

私は憂のパジャマに着替え一緒にのベッドで寝る事にしました。

「お姉ちゃんと一緒に寝るの、久しぶりで嬉しいな……」

「私は昨日も一緒に寝ただけどなあ……まだ本当に10年も経ってるのか実感が湧かないや」

「私もなんだか変な気分・・・いつもお姉ちゃんは私の一步前を歩いてて、私はずっとお姉ちゃんの背中を追いかけてたのに・・・今腕の中に居るお姉ちゃんは私よりも9つも年下なんだもん」

「憂・・・」

「でも、どんな姿でもいいの、お姉ちゃんが戻って来てくれて本当に嬉しいよ」

「心配かけてごめんね」

その夜、私は疲れていたのか直ぐに眠りにつきまして・・・

目が覚めたら元の世界に戻ってたらいいな・・・  
今日起こった事は全部夢で・・・そうしたら直ぐ律ちゃんに謝りに行くのになあ・・・

翌朝、目が覚めると憂はもう起きていて、あずにゃんに電話を掛けていました。

「もしもし梓ちゃん？ おはよう・・・うん・・・今日少しだけ時間作れない？ 大事なお話があるの・・・うん、じゃあ待ってるから」

「夢じゃなかった・・・」

「え？」

「うん、なんでもない・・・それより今電話してた相手ってあずにゃん？」

「うん、今からこっちに来るって言ってたよ」

「そなんだ・・・あずにゃん私が居なくなった事、怒ってるよね・・・」

「そんな事ないよ、梓ちゃん今でも時々お姉ちゃんの話するもん、きつと凄く喜んでくれるよ」

「そう・・・かな・・・」

2時間くらいしてチャイムが鳴りました、きつとあずにゃんだね。憂は玄関を開けて何か話してるみたい。

「いらつしゃい梓ちゃん」

「憂おはよう、大事な用があるって言ってたけど何？ 相談事？」

「えつとね、今からある人に会って貰いたんだけど・・・絶対に驚かないでね」

「何よそれ？ そんな驚くような人と会わせようって言うの？」

「いいから！ とにかく深呼吸して！」

「はいはい」

「じゃあ、奥のリビングに居るから・・・」

あずにゃんがその扉の向こうまで来てる・・・でも何て声を掛け  
たらしいんだろ・・・

「えへへへ・・・あずにゃんお久しぶり」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「あずにゃん随分雰囲気が変わったね、すっかり大人の女性に」

「ゆー！ 唯先輩！」

あずにゃんは私の言葉を遮るように勢い良く抱きついてきました。

「今まで何処に行ってたんですか！ 私、先輩が居なくなっただけ  
悲しんだと思ってるんです！ 憂だって・・・唯先輩のバカ・・・」

「ごめんねあずにゃん」

そう言つとあずにゃんは泣き崩れてしまいました。

私って本当にみんなに辛い思いをさせて来たんだなあ・・・

「憂！ 唯先輩はいつ帰って来たの？ どうして居なくなった時と同じ姿なのよ」

「お姉ちゃんは昨日の夜、急に帰って来たんだけど・・・どうして年を取っていないのかは私も分かんないの・・・だから今後の事とかも含めて、梓ちゃんにも一緒に考えてもらおうと思って呼んだの」

「そう言う事なら何でも協力するから！ 先輩！ 安心して下さいね、私は何があっても唯先輩の味方ですからね」

「あずにゃん・・・」

「まず、あの日・・・私とムギ先輩が帰ってから唯先輩が家に戻って来るまで何があったのか教えてもらえますか？」

私はあずにゃん達が帰った後、音楽室の壁に小さな扉を見つけた事、そしてその中に入って行った事、トンネルを抜けるとまた音楽室に戻って来てた事を順を追って説明しました。

「そんな不思議な事って本当にあるのかな？」

「あるも無いも、実際目の前に10年前の姿の唯先輩が居る訳だし・・・」

「うん・・・じゃあ謎を解く鍵はやっぱり音楽室の小さな扉って事だよな？」

「でも音楽室の壁にそんなのあったかなあ？ 私見た記憶ないんだけど」

「あずにゃん、本当なんだってばあ！」

「唯先輩が嘘なんか言っていないのは分かってますよ、とにかくまずは学校に行って扉を調べてみましょう」

早速、私達3人は桜ヶ丘高校へと向かいました。

何か1つでもいいから原因が分かればいいんだけど・・・

・ 第四部 ・

学校の正門前に着いたけど、どうやって中に入ればいいんだろ・

・  
憂もあずにゃんも大人になってるし、「何の用だ！」って聞かれても答えらんないもんね。

「まずはムギ先輩に話をして音楽室の鍵をもらいましょう」

「へ？ どうしてムギちゃんに？」

「あ、そうか・・・唯先輩は知らないんですよ・・・ムギ先輩はさわちゃん先生に憧れてたから高校卒業後は教師を目指して大学に行っただですよ」

「へえ」

「それで3年前に桜ヶ丘高校に赴任してきて」

「そ、そうなんだ！ ムギちゃん凄い」

「だから今の軽音部の顧問はムギ先輩なんですよ」

凄い凄い！

ムギちゃんがさわちゃんの事好きだったのは知ってるけど、まさか自分も教師になってるなんて。

みんな私の知らない10年間で色んな事があっただねえ。

「今の時間だったらちよつどお昼休みだよね？ ムギちゃん職員室に居るのかな？」

「多分そうだと思いますけど」

「どうしようか・・・部外者が校内をウロウロ探してたら怪しまれちゃうよね・・・」

「何言ってるのよお姉ちゃん」

「そうですね、唯先輩は制服着てるんだし、どう見たってこの生徒なんですから堂々と入ればいいじゃないですか」

「あ、そうか！・・・ところで青いリボンって何年生なのかな？」

「え〜つと、今年は青は一年生ですね」

「じゃあ上級生が私の顔を知らなくても怪しまれないね」

私は校舎の中に入っていきましたが、ちよつどお昼時と言う事もあつて学食から美味しそうな香りが漂って来ています・・・あ・・・足が勝手に・・・フラフラと・・・

はっ！ いけないいけない！ もう少して学食の魅力に負ける所だった！

今はこんな事してる場合じゃなかったよ！

職員室を覗き込むと奥に見覚えのある髪の先生が、きつとあの先生がムギちゃんだよね・・・そう言えばムギちゃんって結婚してるのかな？もし苗字が変わってたらどうしよう・・・新しい苗字なんて知らないし・・・あずにゃんに聞いとけばよかった。

ん・・・でも、さわちゃんもみんな名前の方で呼んでたし、ムギちゃんもきつと生徒から人気あるだろうし名前の方で呼んでも大丈夫だよね？

ムギちゃんが私の顔を見て驚かないように下を向いたまま声を掛けてみました。

「すみません、紬先生はいらっしゃいますか？」

「はい？あなたは、えっと、1年生？」

「はい・・・軽音部の事について少しお聞きしたい事がありました」

「あら、もしかして入部希望者なのかしら？ 今行くから少し待っててね」

ムギちゃんって先生になってもポワポワした話し方は変らないんだね。

もしかしたら今でもムギちゃんがお茶淹れてたりして・・・

書きかけてた書類を片付けてムギちゃんがこっちに来ました。

「えへへへ、ムギちゃん久しぶりだね」

「ゆ!!!!!!!!!!!!!!」

私は大声を出しそうになったムギちゃんの口を手で押さえて小さな声で話しました。

「正門の所に憂とあずにゃんも来てるから、詳しい事はそこで説明するからとにかく付いて来て」

「唯ちゃん・・・本当に唯ちゃんなの・・・」

「うん、心配かけてごめんねムギちゃん」

ムギちゃんは涙を浮かべて言葉を失ってしまいました・・・泣いてる教師の手を生徒が引つ張ってるのってどう見ても不自然だよ。私は出来る限り他の生徒に見られないよう、早足で正門へと向かいました。

「あ、お姉ちゃん、こっちこっち」

「ムギ先輩、忙しい所すみません」

「ううん、そんな事はいいんだけど、今、目の前に居る唯ちゃんって・・・」

私はあの日、ムギちゃんが帰ってから昨日までの事を話しました。

「音楽室の小さな扉・・・不思議な事があるものね・・・でも、それだったら納得できるわ」

「へ？ 何が？」

「あの日から、私はずっと琴吹家の情報網の全てを使って唯ちゃんを探してたのよ」

「そ、そんな事までしてくれてたんだ」

「それなのに・・・世界中のどこに居たって探し出せる自信はあったのに・・・たった1つの痕跡すら見つけられないなんて絶対に考えられなかったもの・・・」

「ムギちゃん・・・」

「でも、無事で本当に良かったわ、また唯ちゃんに会えるなんて思ってもみなかった・・・」

そう言つとムギちゃんはまた泣いちゃった・・・憂もあずにゃんも釣られて一緒に泣き出したし・・・

「ねえ、ムギちゃん・・・とにかく原因、って言うか謎を解く鍵は音楽室の扉にあると思うんだよね、だから一緒に音楽室に来てもらえないかな？」

「あ、うん・・・そうよね・・・ごめんなさいね気が動転しちゃって」

「ううん、それだけ私がみんなの心に傷を残しちゃったって事だもん・・・ごめんね」

こんな未来は絶対にヤダ！ 必ず10年前に戻って律ちゃんに謝るんだ！ 音楽室に、小さな扉の前に行けば全部解決する筈！

この時の私はそれだけを考えていました。

ムギちゃんは音楽室の鍵を取る為に一旦職員室に戻り、その後、私達と合流しました。

「唯先輩、どこに小さな扉があったんですか？」

「ほら、私がいつも座ってた場所の後ろの壁に・・・」

「この壁ですよ？ そんな扉なんて無いですけど」

「嘘！ 足元に私が這って入れるくらいの扉がある筈よ！」

でも、確かにそこには壁があるだけで小さな扉なんて無かった・・・

そんな・・・絶対にその壁で間違いないのに・・・

でも、もしかしたら勘違いしてたのかもしれないよね・・・私は

音楽室全部の壁を調べてみました・・・調べたけど・・・どこにも扉なんて無かった。

「そんな！ どうして無いのよ！」

音楽室にさえ行けば全て解決する・・・そんな甘い希望は簡単に砕かれちゃった・・・

この先、私はどうしたらいいの・・・

- 第五部 -

不安で押しつぶされそうになってる私に憂が話しかけて来ました。

「お姉ちゃん、大丈夫だよ！ 私が付いてるから」

「憂……」

「戻れなくてもいいじゃない……ううん、そうじゃない……戻れなくて良かったのよ……」

「な！ 何を考えてるのよ憂！ どうしてそんな酷い事言うの?!」

「だって扉が見つかったたら……お姉ちゃんまた居なくなるんじゃないよ?……私、そんなの嫌だもん」

「……」

「この10年間ずっとずっと悲しくて辛くて……いつも一人ぼっちで泣いてた……」

「憂……」

「でもお姉ちゃんは帰ってきてくれた！ どんな姿だっていいの、もう一人になるのは嫌！ もう絶対にお姉ちゃんと離れたくないのよ!」

「そうですよ唯先輩！ このままでもいいじゃないですか！ 私も

あんな思いはもうしたくないです」

「あずにゃん……」

「お姉ちゃんは何の心配もしなくていいから、私が面倒見るから、また高校に通って一緒に暮らしましょう」

「そうよ、転校生って事でいいじゃない！ 転入手続きとかは私が上手くやっておくから」

確かに元に戻れないんならここで生活して行くしかないんだけど……でも……

もし帰れないとしても聞いて確かめておかなければならない事がある……私はそう思いました。

「ねえムギちゃん……律ちゃんと澪ちゃんはどうしてるの？」

「それは……」

「分かんないの？ どうして？ あんなに仲良しだったのに連絡も取り合っていないって言うの？」

「……」

「何とか言つてよムギちゃん！」

「唯ちゃんには辛い話になるかもしれないわよ」

そう言ってムギちゃんが説明をしてくれました。

私が居なくなつた責任を感じて律ちゃんが学校に来なくなつた事・

・  
それに続いて澁ちゃんも・・・

携帯電話も換えたみたいで連絡がつかなくなり、そのまま月日が流れた事など・・・

「ただの喧嘩だったらここまで酷くはならなかつたと思つわ、時間は掛かつたかもしれないけど仲直り出来たと思うの・・・でも・・・

「  
私が居なくなつたから？ 私が仲直りするキツカケを潰してみんなに辛い思いをさせてるんだね。」

「悲しい事だけど、こうなつてしまつてはもう・・・」

「ムギちゃんはそれでいいの？ 後悔してないの？」

「唯ちゃんには分からないでしょうけど、10年間って言うのは傷を癒して心を変えるのには充分な時間なのよ」

「何それ？ ムギちゃんはもう澁ちゃん達の事は忘れつつ言うの？」

「唯ちゃんも変える事の出来ない過去よりも、これからの事を・・・」

未来を考えないと」

「そつよお姉ちゃん」

「憂……」

「慣れるまでは大変だと思うけど、お姉ちゃんならすぐ新しいお友達も出来ると思うし」

「そうですね！ 唯先輩なら軽音部でまた人気者になれますよ」

新しいお友達？ 人気者？

違う……私はそんなの望んでいない……みんなと一緒に大人になりたかったのに……

「ヤダ……こんな未来ヤダよお……どうしてこんな事になっちゃったの……律ちゃんに謝りたいよ……澪ちゃんに会いたいよお……うええええええええん」

「お姉ちゃん泣かないで……お姉ちゃんが泣いたら私まで……」

「やだやだやだ！ あの扉は何だったの……うえええええん元に戻りたいよお」

私は憂にしがみ付いて泣きました……

ここでのこれからの生活なんて考えられない……ううん、それ以前に頭の中が真っ白になって、もう何も考えられなかった……

いつまでも泣き止まない私を見兼ねたのか・・・  
長い沈黙が続いた後、ムギちゃんがゆっくりと話し始めました。

「ねえ唯ちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「3年の時、1組に居た杉浦さんって覚えてる？」

「杉浦って・・・オカルト研の奈保子ちゃんの事？」

「そうそう」

「奈保子ちゃんがどうしたの？」

「今思い出したんだけど、彼女、唯ちゃんが居なくなっただ後に『一昨日の音楽室は条件が重なっていた・・・唯は時間跳躍タイムリープしている筈』って言ってたのよ」

「時間跳躍って・・・今の私の状況じゃないの？ 条件って！ 条件って何なの?!」

「その時は誰一人としてそんな事は信じなくて・・・当然私も信じてなかったから、逆に『唯ちゃんが居なくなってみんな悲しんでるのにいい加減な事言わないで!』って怒っちゃって・・・」

「・・・覚えてないの？」

「うん・・・ごめんなさいね、でも連絡を取れば何か情報が得られると思うの」

「私、奈保子ちゃんの電話番号なんて知らないよ？ ムギちゃん知ってるの？」

「私も杉浦さんの連絡先は知らないけど、同じクラスだった木下さんなら知ってると思うし」

「そっか！ しずかちゃんと奈保子ちゃんお友達だもんね」

真つ暗な海に放り出されたような絶望感があったけど、光が・・・ほんの小さな光だけが見つかったような気がする・・・

「もし引越しなんかで連絡先が変わっても、うちの情報網を使えばすぐ分かるし」

「うん」

「それでね唯ちゃん、もう一つお話があるんだけど・・・」

「え？ 何？」

「・・・えつとね」

「何なのよムギちゃん」

「遷ちゃん達に会いたい？」

「え！ 会えるの?!」

「うちの情報網を使えば世界中どこに居ても2日あれば探し出す事が出来るわ・・・唯ちゃんみたいなきースは別だけど・・・」

「本当に？ 本当に会えるの?!」

「でも簡単に答える前によく考えて欲しいの」

ムギちゃんは少し寂しそうな表情になったけど、どうしてなんだろう・・・

「澪ちゃんに会いたい！ 律ちゃんに謝りたい！」

「会えるなら今すぐにでも会いたいのに・・・いったい何を考えろって言ってるんだろ？」

「さつきも言っただけど・・・10年って人の心を変えるのには充分過ぎる時間なのよ」

「うん・・・」

「ましてあの2人は桜ヶ丘高校を中退してるし・・・傷付いた心がその後の2人にどんな影響を与えてるか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もしかしたら唯ちゃんを恨んでるかもしれないわよ？ それでも会いたい？」

「・・・そうだよね・・・人生をメチャクチャにされたんだもん・・・私の事恨んでてもしょうがないよね」

「唯先輩！ そんな無理して会う事ないじゃないですか！」

「そつよお姉ちゃん」

「うづん・・・でもやっぱり会いたい・・・無視されるかもしれないけど・・・もしかしたら叩かれるかもしれないけど・・・」

「お姉ちゃん・・・」

「どんなに罵られてもいいの・・・それだけ私はみんなに酷い事をして来たって言う事なんだから・・・でも、ここで生きて行く事になったとしてもケジメだけは付けておきたいの、一言だけでいいから『あの時はごめんなさい』って伝えたいの・・・」

「分かったわ唯ちゃん、そこまで考えてるならもう何も言わないわ」

「うん、ありがとうねムギちゃん」

「それじゃ見つまり次第連絡するわね」

もし可能なら壊れてしまった仲を修復したい・・・

修復出来ないのなら・・・せめて本心を伝えたい・・・私はそう思いました。

- 第六部 -

次の日の夕方、早速ムギちゃんから電話がありました。

「もしもし唯ちゃん？ 湊ちゃん達がどこに居るのか分かったわよ」

「本当に？」

ムギちゃんの話によると二人は今、関西の方に居るみたい。

桜ヶ丘高校を中退した後、誰も知ってる人の居ない場所に行きかいて・・・そう両親を説得して二人だけで神戸に行ったらいいの。そこでアパートを借りて近くの高校へ編入して・・・卒業した後も二人は同じ会社に就職して、今も一緒にマンションに住んでるって事だった。

私は明日の朝、始発で会いに行こうと思っただけど・・・やっぱり少し不安・・・

そんな私の心を感じ取ったのか、憂が優しく言いました。

「お姉ちゃん、明日は会社お休みさせてもらうから私と一緒に行くね」

「憂・・・いいの？」

「当たり前じゃないの、お姉ちゃん一人で行かせられる訳ないですよ？」

「……ありがとうね」

もともと優しくしてシツカリ者だったけど、大人の憂はそれ以上に頼りがいがあった。

二人で駅前まで行くと、そこにはあずにゃんが立っていました。どうやら私達が来るのを待ってたみたいです。

「唯先輩おはようございます、私も一緒に行きますからね」

「あずにゃん……お仕事はいいの？」

「大丈夫ですよ！ 私、普段から真面目に仕事をしてますから、少し体調が悪いつて言っても疑う上司は居ませんしね」

「そんな……仮病まで使って……」

「何言ってるんです、私は唯先輩の味方だつてずっと言ってるじゃないですか」

「あずにゃん……」

その時、携帯電話が鳴りました……着信画面を見るとムギちゃ

んからでした。

「もしもし」

『おはよう唯ちゃん、本当なら私も付いて行きたかったんだけど学校をお休みする訳にはいかないから・・・ごめんなさいね』

「うっん、教師って自分の事だけやればいいってお仕事じゃないもんね、生徒達が居るんだから仕方ないよ・・・それに遷ちゃん達の居場所を見つけてくれただけで充分だし」

『うん・・・唯ちゃんが神戸に行ってる間に杉浦さんの事も探しておくから、気をつけて行って来てね』

「ありがとうムギちゃん、それじゃ行って来るね！」

私達三人は新幹線で新神戸駅まで行き、そこからはムギちゃんにFAXで送って貰った地図を頼りに、地下鉄に乗り換え、マンションのある駅へと向かいました。

「神戸って坂道多いね・・・」

「少し横浜に似てますよね？ どちらも港と山があって共通してる所が多いし」

駅からの坂道を少し歩くと、大きなマンションがいくつも建って

いる場所に着きました。

メモによるとその中のC棟に遷ちゃんと律ちゃんが住んでるみたいだけど……

「唯先輩、郵便受けに名前が書いてあるからここで間違いないですよ」

「律ちゃん居るのかな？……」

「うーん、この時間だと会社に行ってると思いますけど、念の為にチャイムを押してみましよう」

入り口はオートロックになってて、あずにゃんがチャイムを押しても反応はありませんでした。

「やっぱり居ないみたいですね、どうします唯先輩？ 会社だとしたら最低でも5時までは帰って来ないと思いますけど」

「玄関先で待ってるのも他の住人の迷惑になるし、駅前で時間潰すしかないよね」

私達はまだ朝食を食べてなかったので近くにあったレストランで食事をする事にしました。

その後、憂は私を気遣ってどこか見学にでもって言ってくれたけど……とてもそんな気にはなれませんでした……確かに観光で

来てるんだったら色々な所を廻ったかもしれないけど、今は律ちゃん達に何て言おうか考えるだけで精一杯・・・

憂とあずにゃんには悪かったけど、何をしてもなく時間は過ぎて行き夕方になりました。

「お姉ちゃん、そろそろマンションの方に戻ってみようか？」

「うん、もうすぐ帰って来るかもしれないもんね」

さすがにこの時間だと会社や学校から帰って来る人やお買い物帰りの人が多いので、私達3人は見逃さないように玄関の横で通り過ぎる人を見ていました。

「唯先輩！ あの人！」

あずにゃんの目線の先を見ると、そこには一人の女の人が・・・

髪の色や髪型は私の知っているそれとは全然違っていました、雰囲気は確かに澪ちゃんに似てるような気が。

何か音楽を聴いているのか、その人は楽しそうに歩いていました・・・今からあの顔がどんな表情になってしまうのか・・・それを考えると自然と憂にしがみ付く手に力が入ってしまいます。

玄関の前まで来た女の人に憂が声を掛けました。

「あの・・・間違いでしたら申し訳ありませんけど・・・秋山澪さんでしょうか？」

声を掛けられたのが余程意外な事だったのか、反応はあまりありませんでした。

「ご無沙汰してます・・・平沢憂です」

「!!!!!!」

「梓です・・・お久しぶりです澪先輩・・・」

声を掛けたのが憂だと分かり澪ちゃんは驚きの表情を見せました・・・  
その後、一瞬だけ懐かしい人に出会えて喜んでいるように見えたけど、すぐに表情は険しくなりました。

「い・・・今更何の用があってこんな所まで来たんだよ!」

「今日は澪さんと律さんにお話があった」

「話？ 私はあなた達と話す事なんて何も無いよ!」

「澪先輩！ 怒ってるのは分かりますけど話だけでも聞いて下さい」

やっぱり澪ちゃんは私の事を恨んでた・・・でも謝らないと・・・  
そう決めて来たんだから・・・  
なのに私の口から発せられるのは泣き声だけでした・・・

憂の背中に隠れて泣いている私を見つけた澪ちゃんは不思議そう  
に尋ねました。

「その泣いてる子は誰なんだ？ 知り合いの子なのか？」

「ほら、お姉ちゃん・・・」

憂に背中を押され前に出た私を見て、澪ちゃんは言葉を失いまし  
た。

「!!!!!!!!!!!!!!」

「うええええん、ごべんなざい、みおちゃん・・・」

「ゆ・・・唯・・・なのか？」

「ごべんなざい、ごべんなざい」

「唯・・・その姿はいつたい・・・」

高校生の時に失踪した友達が、その時のままの姿で目の前に居る・  
・  
このあまりにも非現実な状況に澗ちゃんは怒りを忘れてしまった  
ようで、その後は私達の話の聞いてくれるようになりました。

「ここじゃ何だから、とりあえず私の部屋に来て」

私達は澗ちゃんと律ちゃんが住んでいる部屋へと通されました。

「澗先輩・・・律先輩はまだ帰って来ないんですか？」

「今日は私が晚ご飯の当番だから定時で帰って来たけど、律はまだ  
少し残業するって」

「そうなんですか・・・」

「それより、唯が高校生のままって・・・どう言う事なんだ？」

「それについては私達もはっきりとは分からないので、律先輩が帰  
ってきたら唯先輩の口から直接話してもらおうと思っんですけど」

「うん・・・わかった・・・」

そうこうしてるうちに律ちゃんが帰ってきました。

玄関に見慣れない靴があるので会社のお友達か来てるのだと思っ  
たのか、元気な声で部屋に入ってきました。

この声・・・この雰囲気・・・やっぱり律ちゃんだ・・・

「ただいま滞る！ 誰が来てるんだ？」

「あ、おかえり律・・・実は・・・」

憂とあずにゃんの事はすぐに分からなかったみたいだけど、私の姿を見た途端、律ちゃんは言葉を失い小刻みに震えだしました。

今から説明する事がどれだけ伝わるのかな・・・

私は律ちゃんの仕事が嫌いになつて消えたんじゃない・・・本当はあの時に謝りたかった・・・そして今でも大好きだつて分かつてもらいたい・・・

仲直り出来たらいいな・・・

- 第七部 -

「は……はは……何なんだよこれ……冗談にしちゃ趣味悪過ぎるぞ……」

「律、信じられないのは分かるけど」

「漣！　ずっと私が後悔して苦しんでるの知ってるくせに、どうしてこんな酷い悪戯するんだよ！」

今、律ちゃんは『後悔してる』って言ったよね？……

10年経った今『恨んでる』じゃなくて『後悔して苦しんでる』って……

「私のせいで……私のせいで……」

「律！　いいから落ち着け！」

漣ちゃんに抱き締められて律っちゃんは泣いてしまいました。

恨まれていて当たり前なのに……罵られても仕方ないと思っただいの……

なのに、律ちゃんは自分の事を責めて、ずっと苦しんでいたなんて……

「律ちゃん・・・私、偽者なんかじゃないよ・・・本物の唯だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「唯・・・とりあえず何がどうなってるのか説明してくれないか？」

無言で泣いている律ちゃんの代わりに、澪ちゃんが私に聞いてきました。

「うん・・・律ちゃんと喧嘩したあの日・・・」

私は順を追って話しました。

何も考えられず音楽室に一人が残っていたら小さな扉を見つけた事・・・

小さな扉に入ったらここに・・・10年後の世界に辿り着いた事・・・

そして何よりも伝えたかった想い。

私はあの日の夜には喧嘩した事を悔やんでいた・・・律ちゃんに謝って仲直りしたかった・・・

みんなの前から消えるなんて・・・みんなと離れるなんて考えもしなかった・・・

「私、律ちゃんの事嫌いだななんて思った事ないもん・・・今でも大好きだもん・・・だから・・・お願いだから許して・・・」

その後はもう言葉にならず、私は泣きながら謝るしか出来なかった。

泣き声だけが響く空間・・・時間だけが過ぎていく中、律ちゃんがポツリと話しかけてきました。

「唯・・・突然ここに来たって事は・・・失踪しようと思ってしたんじゃないって事は・・・10年間辛い思いをして来たんじゃないんだな？」

「うん・・・私の中では喧嘩してからまだ数日しか経ってないし・・・」

「よかった・・・」

そう言つと律ちゃんはまた泣きだしました。

信じられない様な話を聞かされて尚、自分が辛い思いをして来た事よりも先に私の事を考え・・・そして辛い思いをしなかった事を『よかった』と言ってくれる律ちゃん・・・

ムギちゃんは10年と言う時間は人の心を変えるのに充分だって言っただけど、律ちゃんは何も変わっていなかった・・・私が知ってる優しい律ちゃんのままだった。

どうして私はこんなにも優しい律ちゃんと喧嘩なんかしたんだろう・・・うん、もう原因なんてどうでもいいの・・・

言葉を交わすたびに少しずつ解きほぐされて行く想い・・・みんな本当は喧嘩別れする事なんて望んでいなかった・・・ずっと仲良しで居たかった・・・

そう、私のせいでキツカケを失っていただけ・・・本音を話す事が出来た私達にとっては、小さなすれ違いから生じた歪みを心から消す事は時間の掛かるものではありませんでした。

みんなの気持ちが和らいだ時、突然携帯が鳴りました。

『もしもし唯ちゃん？』

「あ、ムギちゃん！ 聞いて聞いて！ 律ちゃんと会って仲直りしてきましたよ！」

『本当？ 良かったわね唯ちゃん』

「うん、でね・・・」

『ちょっと待って、お話は後で聞かせてもらおうわ、それよりも』

「ん？ どうしたのムギちゃん？」

『急な話で悪いんだけど、今すぐこっちに戻って来て欲しいの！』

「え〜！ 今すぐって言われても、もう新幹線の最終便に間に合わないよ？」

『大丈夫よ何とかするから、今から私の話すとおりにして』

「うん・・・わかった・・・」

真剣な表情で電話を掛けてる私をみんなは心配そうに覗き込んでます。

「お姉ちゃん？ 紬さんから何のお話だったの？」

「あのね・・・オカルト研の奈保子ちゃんと連絡が取れたらしいんだけど」

「え！ 本当に？」

「奈保子ちゃんの話だと次に時間跳躍タイムリープの条件が揃うのは明日の朝、日の出前の数分だけとか・・・その後はもう数百年の間は無いらしいの・・・だから今すぐ戻って来てって」

「今すぐって・・・そんなの無理よ」

「ムギちゃんが神戸空港に自家用のジェット機を手配したから、とにかく空港まで来て欲しいって言ってた」

詳しくは分かんないけど、この時間だとタクシーを呼べば1時間くらいで空港まで行けるよね。

とにかく急がなきゃ！

荷物を持って出ようとした時、律ちゃんが言いました。

「唯！ 空港まで急いでるんだったら私が送っていくよ！ 駐車場に車を置いてるから持って来る」

そう言うと律ちゃんは慌てて外に飛び出して行きました。

「唯先輩！ これで10年前に戻れるかもしれませんね」

「うん・・・ごめんね澪ちゃん、もっとお話したかったんだけど・・・」

「なあ唯・・・私と律も一緒に行つていいか？」

「え？」

「せつかくわだかまりが解けたのに・・・唯と仲直りする事ができたのに、このまま別れるなんて出来ないよ・・・10年前の世界に戻る事が出来るんだったら・・・その姿を最後まで見届けたいんだよ・・・」

「澪ちゃん・・・」

律ちゃんの運転する車は結構荒っぽくて、あつと言つ間に空港に到着しました。

自家用機はもう出発の準備が整つていて、あとは私達が乗り込むだけでした。

時間は深夜の0時過ぎ・・・さすがにみんな疲れたのか寝息が聞こえます。

そんな中、ふと見ると憂だけが悲しそうな表情で外を見ていました。

「憂・・・どうしたの？」

「うつん・・・何でもないよお姉ちゃん」

憂は笑って誤魔化そうとしたけど、私には何が悲しいのか伝わって来ました。

学校に着いたら私がまた居なくなっちゃう・・・その事を考えてたんだと思います。

それが分かっているのに私は何て声を掛けたらいいんだろう・・・

結局答えは見つからないまま学校に到着しました。

「唯ちゃん、こっちこっち・・・間に合ってよかったわ」

「ムギちゃん色々ありがとうね」

「うつん、そんな事より早く音楽室に行きましょ」

日の出までは時間があるので音楽室にはまだ何の変化もありません

んでした。

「こうしてまた先輩方と集まる事が出来るなんて・・・私、思ってもいませんでした・・・」

「あずにゃん・・・」

「そうだな・・・私も律も何を意地になってたんだろうな・・・10年もの時間を無駄にして・・・ほんとバカだったよな」

「ううん、澪ちゃんだけじゃないわ、私も・・・」

ムギちゃんがそう言い掛けて泣きそうになった時、律ちゃんが話しました。

「誰が悪いつて訳じゃない、みんなバカだったんだよ・・・でもいいじゃないか、それに気付く事が出来たんだから・・・私達はもう同じ過ちはしない!」

私達は全員で手を取り合ってその思いを確認し合いました。

「それにしても唯先輩」

「何？ あずにゃん？」

「正直な所、私まだ信じられないんですけど本当に小さな扉が現れるんでしょうか？」

「うん……でも今は奈保子ちゃんの情報しかないから待つしかないと思うし……」

みんなで壁の方を見ていると不思議な空気が流れ込んでくるのを感じました……

言葉では表せないけど、とても静かでゆるやかな空気……

「唯先輩……あれ！」

あずにゃんが声を出したけど、みんなも同時に気が付きました。

「本当に……扉が現れましたね……」

「う……うん……」

ここに入って行けば戻れるかもしれない……でも……私は憂が悲しい表情をしているのが気になっていました。

「ねえ憂……」

「何？ お姉ちゃん」

「私、このままこっちに残ろうか？」

「!!!!!!」

「みんなとも仲直りする事が出来たし、また一緒にお茶すればいいよね」

「唯先輩、何言ってるんですか！」

「私だけ高校生だからみんなに迷惑掛けるかもしれないけど・・・  
憂も私が居なくなるよりいいでしょ？」

「ダメ〜〜!!」

「憂・・・」

「お姉ちゃん、私が悲しんでるからそんな事言ってるんでしょ？  
戻りたいのに私の為に我慢しようと思ってるんでしょ？」

「そ・・・そんな事ないよ・・・」

「お姉ちゃんが居なくなるのはイヤだけど、私の為にお姉ちゃんが  
我慢するなんてもっとイヤ!!」

憂はその場で泣き崩れてしまいました・・・私はまた選択肢を間違えたのかな・・・

「なあ唯」

「何？ 律ちゃん……」

「唯が10年前に戻れたとしたらどうなるのか、正直、私の頭じゃ分かんない……突然大人の唯が現れて私達の記憶も変ってしまうのか……それともこのまま唯が居ないままなのか……」

「うん……」

「でも、仮に唯が居ないままとしても今までとは違う……私達は唯がみんなを嫌って消えたんじゃないって分かった……唯はみんなの事が好きだって分かった」

「うん」

「そして唯は幸せな時間へと戻る事ができたんだって……唯が笑顔で居られる世界へ帰ったんだって……そう思えるだけで私達はこの先幸せだよ！ 今までみたいな不幸な気持ちにはならないよ！」

「律ちゃん」

「さあ！ 早く行け！」

そう言っつて律ちゃんは私の背中を押してくれました。

「唯先輩！ 戻れてもあんまり10年前の私に抱きついちゃダメですよ……」

「唯ちゃん！ 高校生の私達によろしくね」

「唯、もう律と喧嘩するんじゃないぞ」

「うん！ みんなありがとうね！」

私は小さな扉を開け、暗くて先の見えないトンネルの中へと進みました。

後ろから泣きそうな憂の声が響きます・・・

「お姉ちゃん！ 絶対に幸せになってね！」

私は必ず戻ってみせるから！ 待っててね10年前のみんな！



「な・・・何なのよこれ・・・嘘でしょ・・・」

まさか江戸時代？・・・時間を遡りすぎたって言うの？・・・  
確かに元の時間に戻れる保障なんて無かったけど・・・だけどこ  
んな事って・・・

私は絶望感に支配されて何も考える事が出来なくなりました・・・

.....

なんて事にはならないよね・・・  
さつきから嫌な考えが頭の中に浮かんで来て消えません・・・

うつん！ 私は絶対に戻らなきゃダメなんだから！ 信じて先に  
進まなきゃ！

やがて奥の方にボンヤリと見えていた明かりが次第に近付いてき  
ました。

薄暗い空間に出た私は、そこがどこなのか直ぐに分かりました。

見慣れたムギちゃんの食器棚・・・

みんなでお話する椅子と机・・・

そしてソファーの上には大事な大事なギー太・・・

そうだ！ ギー太が壊れてないか確認しなきゃ！

音楽室の明かりをつけ、ケースのチャックを下ろした私の目に飛  
び込んできたのは、いつものピカピカのギー太でした。

ギー太！ 私の可愛いギー太！ 間違いない！ 私は戻ってこら  
れたんだ！

でも今って、何日の何時なんだろう？

何か日付が分かるものを探そうとしたその時、階段の下から声が聞こえて来ました。

『お姉ちゃん、どこに行っちゃったのよ！ 一人で苦しんでないで出てきてよ！』

『とにかく、これだけ探しても居なかつたんだからまだ音楽室に残ってるのかもしれないわ』

『そっだよ憂！』

これは憂達の声・・・

と言う事は、今は律ちゃんと喧嘩した日の夜・・・

『あ！ 音楽室に明かりが・・・もしかしたら唯先輩が！』

勢いよく開いた扉の向こうにはみんなの姿がありました。

いつも見ていた高校生の姿のみんなが・・・

戻ってきたら色々と話そうと思っていたのに・・・安心感と喜びで言葉にならず、私はただその場で泣く事しか出来ませんでした・・・

「お姉ちゃん・・・まさかずっとここで一人で泣いてたの？・・・  
どうしてそんなに辛いのに私に何も言ってくれないのよ！」

「私のせいだ・・・唯先輩があんなに悲しんでたのに一人だけ置いて帰っちゃったから」

「ううん、梓ちゃんのせいじゃないわ！私だって・・・あの時帰らないで唯ちゃんの傍に居てあげればよかった・・・」

「違う！梓ちゃんのも紬さんも悪くないよ！」

憂は泣いてる私を抱いたまま律ちゃんの方を見ていました。

「憂ちゃん・・・何でそんな目で律を見るんだよ！律が悪いって  
言いたいのか？」

「違うんですか?!」

「違うに決まってるだろ！唯にも原因があるから喧嘩になったんだろ！」

「何言ってるんです！お姉ちゃんがこんなに悲しんでるのは律さんのせいじゃないですか！」

『止めて！ お願いだから止めて！』

「お姉ちゃん……」

「律ちゃんは悪くない！ 澪ちゃんもムギちゃんもあずにゃんも、誰も悪くなんか無い！」

「唯先輩……」

「私に変な意地を張ってたのがいけないの！ 素直に謝っていればよかつたのに！」

「唯ちゃん……」

「律ちゃんごめんなさい……お願いだから許して……」

「唯……」

「あんな未来はもうヤダよ……おねがいがらゆるじで……」

「もう謝らないでくれよ！ 私だって素直にならなかったのがいけないんだから！」

「ごべんなざい！ りっちゃんごべんなざい！ うえ……うえええええん」

「頼むから泣かないでくれよ……私だって……私だって……」

その後、律ちゃんと私はお互いに謝りながら泣いていました。

「澁先輩・・・私、本当にバカでした・・・先輩に酷い事言っちゃつて・・・すみませんでした・・・」

「澁ちゃん、私も・・・ごめんなさい」

「梓、ムギ・・・私の方こそ感情的になりすぎてたよ・・・ごめん・・・」

「誰が悪いつて訳じゃない、みんなバカだったんだよ・・・でもいいじゃないか、それに気付く事が出来たんだから・・・私達はもう同じ過ちはしない」

律ちゃん・・・大人の律ちゃんと同じ事言ってる・・・  
やっぱりこっちの世界と向こうの世界は繋がってるんだ・・・

だとしたら向こうのみんなどうなったんだろう？ 私達が仲直り出来た事で何か変わったのかな？

みんなの周りには喧嘩をする前と同じ緩やかで優しい空気が戻ってきました。

そんな時、憂が。

「そうだ、お姉ちゃんまだご飯食べてないんですよ？」

「う、うん」

「私ね、お姉ちゃんが喧嘩したって電話を貰ったから、励まそうと思ってお料理作って待ってたのよ」

「ハンバーグとケーキでしょ？」

「え！ どうして分かったの？」

「えへへへ、何となくね」

「お姉ちゃん凄い勘ね・・・」

「ねえ、みんなも一緒に食べて行かない？」

「いいの？ 唯ちゃん」

「そう言えば唯先輩を探すのに必死で何も食べてなかったですね」

「はは、安心したらお腹が空いてきちゃったな」

「律の食いしん坊・・・」

「なにおう！ 溲だってさっきからお腹がなってるぞ！」

「そ！ そんな訳ないだろ！」

「でも、こんな時間に食べて太らないかしら？・・・」

「大丈夫だよムギちゃん！ 私、何時に食べても全然太らないし」

「・・・」

「・・・唯・・・せつかく仲直り出来たのに、また喧嘩売ってるのか？」

「今のは私も律ちゃんと同じ見だわ」

「律先輩もムギ先輩も落ち着いて下さい！ まあ私も今のは唯先輩が悪いと思いますけど」

「ええ〜！ しょんなあ〜！」

「あははは！」

10年後のみんな・・・

今度はゆっくり時間を掛けて・・・

楽しい思い出をたくさん作って・・・

絶対にみんなが笑顔で居られるような世界にするから・・・

だから・・・期待して待ってね。

- 後書き -

やっと書き終わったあ〜！

って言うのが今の正直な気持ちです。

最初、物語を思いついた時は

『喧嘩をした唯ちゃんが泣き疲れて眠り、嫌な夢を見て反省する』

って言う短編のつもりだったんです。

でも、夢落ちは単純すぎるかな？ もっと変った出来事の方がいいかな？・・・

なんて考えを持ってしまったが故に取り返しのつかない大変な事になってしまいました。

科学やSFの知識が皆無な私に、納得できる時間跳躍の理由が思いつく筈が無く、結局

『どうしてだか分かんないけど、とにかくタイムトンネルが出来たの！』

って力技を使うしかない状況になってしまい大変反省しています。

また、唯ちゃんを酷い立場に追いやってしまった為に、なかなか物語を纏める事が出来ず、納得のいく言葉を組めなかった事も反省し

ています。

でも、何はともあれ、お読み頂いた皆様の足跡とご感想のおかげで最後まで書き終える事ができました。

本当にありがとうございます。

今回の経験で唯ちゃん達は、不幸な出来事を回避する力を身につけたと思いますので、今後は幸せな方向へと進むと信じています。

これからも思い付きだけで拙い文章を書き続ける事になると思いますが、なが〜い目で見守って頂けたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8819p/>

---

けいおん！ - ごめんなさいが言えなくて -

2011年7月14日14時40分発行